

日本花菖蒲協会創設の功労者、井下 清 元会長について

会長 椎野昌宏

本年は、日本花菖蒲協会創設を推進した元会長であった井下清先生の生誕 130 周年の年となりますので、この機会に氏について振り返ってみたいと思います。

江戸時代の約 265 年の間、大きな問題もなく平和が続き、江戸文化が開花しました。それが明治に一新後、東京となり、状態が一変します。今まで享受してきた江戸文化から離れ、あらゆる欧米の文明を導入する魁となり、咀嚼し、日本の他の地域に伝える配電盤のようになりました。大体のデザインは決まり、これを完成し、定着させるためには実行力のある実務派が必要となります。このような時に、東京の都市計画の推進者として、井下清先生が登場しました。彼の仕上げた欧米型都市改造成果として、他の地域のモデルになった公的側面の活動については簡単に触れ、園芸界に注いだ情熱と成果について詳しく説明します。

(生い立ち) 先生は明治 17 年(1884)京都府に陸軍軍医の井下気一の長男として生まれ、明治 38 年に東京高等農林学校を卒業しました。同校は東京大学農学部の前身で、農業に関する日本の総合教育、研究機関でした。卒業後、東京市役所の土木課公園造園係に奉職しました。そこで先輩で上司の長岡安平(1842-1925)や本田静六(1866-1952)と会い、その指導を受けました。長岡は日本の造園家の草分け、本田は林学の先駆者で優れた人たちでした。彼らの指導のもとに、旧来の社寺境内公園を時代に即応するよう改造する仕事に従事しました

(公的側面の活動から)

その 1. 大正 12 年 9 月 1 日に起こった関東大震災は東京に壊滅的な被害をもたらし 10 万人もの死者を出しました。地震の震動による被害よりは、それによって生じた失火が烈風に煽られて空前の惨事となりました。とくに火に追われて本所の被服廠跡の空き地に逃げ込んだ人達は四方から押し寄せ火のつぼとなり 3 万 8 千人もの死者を出しました。ところが近くの深川の 3 万坪を占める岩崎家別邸(後の清澄公園)の森へ逃げ込んだ人々は、そこに広大な樹林や池などあり一人の死者も出ませんでした。この事例を経験として、東京市は震災復興小公園計画をたて、52 の小公園を市内各地に建設しました。鉄筋コンクリート造りの小学校と組み合わせ、通じる道路も整備し、公園は平

常時には学校の運動場や付近の人たちの憩いの場となり、緊急時には学校の建物と公園の広場を避難場とする狙いでした。彼はその時公園課長であり、これら計画の立案、実施の責任者として奮闘しました。それぞれ 900 坪から 1,000 坪のこれら小公園は日本全国の都市型公園のモデルとなりました。

その 2. 先生はかねてより欧米型の墓地を兼ねた公園の創設を計画していましたが、まだ未開発で遠隔地であった東京市西部の多摩村に着目しました。そして約 30 万坪の緑に囲まれた日本初の大規模な公園墓地が彼の指揮のもとに建設され、大正 12 年に開園しました。従来の寺院型墓地から、欧米風の風景墓地へ展開するきっかけとなりました。

その 3. 東京の街路樹は明治 7 年(1874)銀座通りにサクラとクロマツが植えられたのが始まりで、しだれ柳が加わりました。然しその後、近代都市に相応しい樹種としてイチョウ、ユリノキ、ミズキ等に植え替えられヤナギは姿を消しました。これが前述の大正 12 年の関東大震災後の復旧の、第一段として昔懐かしい銀座のヤナギの復活植替えが地元の与論として湧き上がりました。井下先生たちも中心となって音頭を取り、昭和 7 年(1932)に植替えが終わり、銀座のヤナギが再現しました。西條八十の懐かしのメロディー [植えてうれしい銀座の柳、江戸の名残のうすみどり、吹けよ春風紅傘、日傘、今日もくるくる人通り] が大いに人々の共感呼び歌われました。

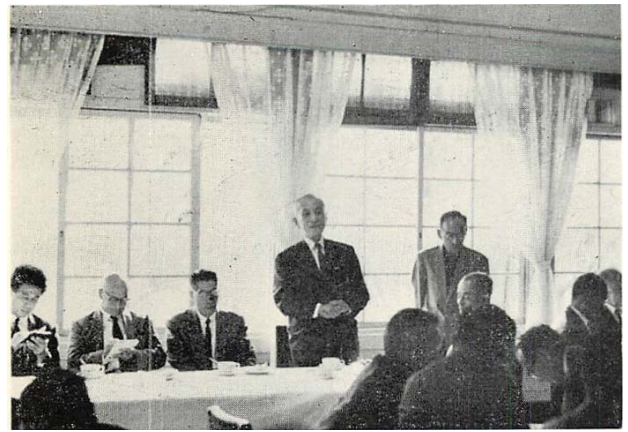
その 4. 先生は昭和 17 年(1942)に東京市公園部長となり、終戦を迎え、同 21 年(1946)定年により退職し、すぐ東京農業大学教授に迎えられる。その頃、焦土と化した日本を立て直すため、日本全国に樹を植えようと強く訴えています。‘我々は日本国民の心意気とする桜花を再び野に山に咲き棚曳かしたい。杉も檜も伐っても尽きぬだけ山に植林したい。薪を採っても炭に焼いても次ぎ次ぎ萌生するだけの雑木林をほしい。神仙ともに居ますような境内の林、四季の眺め、美しい都市緑地の森、整然とした街路樹、平和日本の観光資源たる国土の樹林美は何としても復興せねばならぬ緊急事である’と力説しています。(昭和 22 年、観光) 彼はなかなかの文章家で、スケールの大きい思想家でもあり、敗戦直後から今の日本を予見し、その進むべ

き道を示しました。

(私的側面—園芸関係の活動から)

その1. 公園利用を大衆化するため、部下の市川政司氏とともに、民間の園芸家や団体に積極的に奨励して、彼らの丹精こめた作品を東京市の中心部に位置する日比谷公園で展示するようになりました。大正3年(1914)に東京菊花会が第1回の展示会を開催し大菊盆栽、盆栽、懸崖、江戸菊などを飾りました。朝顔も東京朝顔研究会により、毎夏大輪朝顔のアンドン作り、切り込み作りの作品が展示され、これに変化朝顔研究家が加わって、江戸園芸文化が再演されました。また日比谷公園の展示をきっかけに、昭和6年(1931)には日本花菖蒲協会が結成されました。井下、市川両氏が推進し実現したもので、理事に名を連ねています。展示は前年の昭和5年から始まり、出展鉢数は約700鉢で、堀切花菖蒲園などの江戸系に加え、西田衆芳園の熊本花菖蒲も初めて東京で御目見えし、人気を呼びました。以後戦争による中断はありましたが、菊と朝顔の展示は現在も毎年開催され、日比谷公園の大きなイベントとなっています。趣味家やその団体はえてしてその枠内にとどまり、園芸植物の外部への普及発展に背を向ける傾向であったものを、協会を結成し、一般に作品を公開し、情報を広く提供するようになりました。井下、市川両氏のような個人としても植物が好きであった人たちが、東京市の責任者(現在でいうと緑政関係)の立場で園芸の協会の設立や運営に協力したことが分かります。

その2. 昭和22年(1947)東京農業大学教授を定年による退任後も、日本造園学会会長や、東京都の公園など都市計画に関する委員会や審議会の役員を務めたが、先生の趣味の延長と思われる、花卉園芸方面での地味な貢献について触れておきます。昭和37年(1962)に設立された日本花の会に評議員として、昭和39年(1964)に設立された日本さくらの会に理事として参加しています。両会とも公益社団法人となり、さくらを中心としてその愛護、保存、苗木育成事業を行っています。さくらについては思い入れが深かったようで、古来の山桜や里桜系統のものでなく東京を中心に染井吉野を主流とすることについて、学者や京阪の桜研究者から批判がありましたが、彼は染井吉野は江戸染井の植木屋によって育成されたものであり、礼賛者は一般大衆であることからして染井吉野は最重要樹であるという主張を貫きました。関東大震災のお見舞いとして送られた花ミズキの返礼として東京から送られたの



(松本楼で挨拶する井下先生：会報第11号より転載)

は染井吉野でした。(昭和11年、桜)

その3. 日本花菖蒲協会は戦争による中断後昭和27年(1952)、日比谷公園松本楼で総会を開き再出発しました。先生は戦後復刊第1号会報(1955)以降第13号(1968)に至るまで毎号に巻頭言を花守人のペンネームで格調高い名文を寄稿しました。二つを紹介します。

[花菖蒲の貴さは高雅な形、他の追隨をゆるさぬ構成的な花容であるが、何かこの花に厳かな天来の黙示を授けるかのごとき神秘的な風韻がこもることからであろう](会報第2号)、[花菖蒲は絶えることのない地上の争鬪を冷やかに見渡し、求めよ天の栄光、醒めよ地上の煩惱からと、私たちに向かって厳かな啓示を輝かせている](会報第5号)

先生は昭和37年(1962)から亡くなる昭和48年(1973)まで約10年間、日本花菖蒲協会の会長をつとめました。没年89才。

(人柄と信念—都会に緑を)

先生は明治、大正、昭和にわたって、東京の公園建設や緑地確保のため信念をもって取組み、将来を展望する優れた企画力と卓抜した統率力を発揮して、多くの難事業を成功させました。東京で生まれた欧米型都市改造計画の風景公園、墓地公園、街路樹などは一般庶民の為であり、その作品は他の都市や地方へ近代的モデルとして伝わりました。前日本花菖蒲協会々長の平尾秀一先生は、井下先生の人柄について[協会の会合には必ず定刻前にお顔を出され、米寿のお齡とは思えない若々しい口調で会長あいさつをされ、会員と楽しく語り合われた温容は、いつまでもわれわれの胸に鮮やかである。]と追慕しています。

‘都会に緑を’の理念を貫いた井下先生の遺訓はまさに日本が進むべき道標といえましょう。